牙の魔術師と 出来損ない令嬢

小桜けい







目次

楽しい休日書き下ろし番外編

牙の魔術師と出来損ない令嬢

牙の魔術師と出来損ない令嬢

口 口 ゲ

とある春の H

列席者の見守る中、鮮やかな緋色の髪の男が、祭壇の書に手を置いた。ゆったりと浮遊する魔法灯火の下で、白髪の老師が、祭壇へ誓約の魔術書を載せる。 魔術師ギルドの荘厳な祭儀場では、 荘厳な祭儀場では、建国以来数多の王侯貴族が婚礼の儀を挙げてきた。紫泉は、東京は、東京は、東京は、東京は、東京は、東京は、東京の王都にて、結婚式が行われていた。

めます」 「フレデリク・クロイツは、 ウルリーカ・チュレクの夫として、婚姻を正式なもの

離した。 通称『牙の魔術師』 フレデリ ク・クロイツは、 誓い の言葉を述べ終わると書から手を

年齢より随分と若く見えるのは、 く、全身に生き生きとした力強い生命力を漲らせていた。 礼装用の宮廷魔術師のロー ブがとても良く似合っている。 そのせいだろうか。 今年で三十歳になるというが 細身の優男だが脆弱さはな

上げる。 隣に立つ花嫁……ウルリーカ・チュレクは、 ヴェールの下から彼の横顔をチラリと見

に向けた。綺麗な深緑色の瞳は柔らかな微笑をたたえ、彼がこの婚礼を心底から喜んで いるように見える。 すると、真面目な顔で正面を向いていたフレデリクが、 不意に視線だけをウル リーカ

その 優しげな視線が居心地悪くて、 ウル リーカは慌てて自分のド ス 視線を落と

色の髪と瞳に良く映えている。 しく上等な品だ。華やかだがゴテゴテ飾りすぎる事もなく、 のウルリーカを、 ドレープをたっぷりとあしらった純白の花嫁衣装は、 より可憐にみせていた。 エメラルドを飾っ 急ごしらえとは思えないほど美 十九歳という花盛りな年齢 た銀の宝飾類も、 ヘーゼル

くても良いのに……と、ウルリーカは恐縮してしまう。 これらは夫となるフレデリクからの贈りものだが、何もこれほど豪華な品を用意しな

理だったから、 の誰よりも魅力的で優れた女性をだ。 彼は自分を妻とするものの、その胸の内ではほかの女性を愛して 男爵家の出来損ない令嬢として有名なウルリー その女性を正式な妻にする事は、 カを、 いる。 お飾り妻にするだ 流石の彼でも無る。しかも、国中 か 审

えった。 ズキリと胸が痛み、 つい憂鬱な考えに落ちこみそうになったが、 寸前でハッと我にか

もう決心したはずだ。 お飾りの妻で結構。 彼がほかの誰と愛を育もうが、最初からわかっていた事と割り こうなったら意地でも、幸せな人生を送ってやると。

切って気にしない。むしろこれ幸いと、一人で好きな学問に没頭させてもらおう。 引き結んでいた唇を開き、ウルリーカも誓約の書に手を置いて誓いの言葉を述べる。

「ゥ……ウルリーカ・チュレクは……フレデリク・クロイツの妻として、

婚姻を正式な

ものと…………認めます」

さく震えたものになってしまった。 毅然と胸を張って、 堂々と言うつもりだった誓い の言葉は、

魔力のない

うららかな春の日差しの中。 一ヶ月前。 ウルリーカはあぜ道を走る馬車に揺られながら、

に広がる、のどかな麦畑を見つめていた。

収穫出来る。チュレク家は古くから麦酒の醸造によって財を成してきたのだ。 チュレク男爵領は、ロクサリス王都から程近く、 面積こそ狭いが、良質な大麦が 海年

それを映しながらも、気分が晴れなかった。ほかの事で頭を占められているのだ。 青々とした麦の若穂が春風にそよぐ光景は心地良いものだったが、ウルリーカは瞳に

(お母様が私を呼びよせるなんて、 何があったのかしら?)

性らしい体型は、襟の詰まった衣服にすっかり隠されている。 は、飾りのないピンで簡素にまとめられただけ。ほっそりした手足に豊かな胸という女 憂いを秘めた彼女の横顔は、よく見ればかなり美しい。だが惜しい事に、 艶やか

堅苦しそうな女性に見えた。

と、伝統と格式を重んじるこの国の貴族たちからは失笑されている。 でいる。実家から独立し、裕福な商家の七歳になる娘の住みこみ家庭教師を務めていた。 実家が没落した訳でもないのに、 ウルリーカは、 家督は双子の妹が継ぐ事が決まっており、彼女自身は一年前から王都に住ん チュレク男爵家のれっきとした長女である。 貴族の娘が平民階級の家で家庭教師をするなど…… けれども、ウル ij

人生計画に満足していた。 幼い頃から学問は好きだし、 誰が何と言おうと、自分で選んだ幸せな生活なのだ。 教え子は素直な可愛い女の子、 ウルリーカは自分でたてた 商家の夫妻も気 0

カは気にしないようにしていた。

るようにと、 ところが今朝、 唐突な手紙が届いたのだ。 実家を出て以来音信不通だった母から、 大事な話があるのですぐに帰

されると泣きつかれる始末。 手紙を持って迎えに来た実家の御者に、 お嬢様を連れて帰らなければ、 雇

仕方なく雇い主に理由を話して臨時の休みを貰い、 しぶしぶと帰省する事になったの

が『出来損ない』だからだ。 ウルリーカが家を継がず、 家庭教師として働いているのには、 訳がある。それは彼女

大陸のどの国よりも多くの魔力持ちが住んでいるためについた名前だ。 ロクサリス王国は別名、 魔法国とも呼ばれてい る。 古くから魔法によって栄え、

魔力というものは基本的に、生まれつきの才能である。

もちろん魔法を使うためには、 しかし結局のところ、 どのくらい強力な魔法を使えるようになるかは、 魔術書を読んだり、師について学ぶ必要がある。 生まれ持った

出来ない。 魔力の量によって決まってしまう。 魔力を持たない者が、 努力で魔力を身につける事は

事が必須とされている。 た存在』とみなされた。王家を筆頭に、 貴族の家督を継ぐ者は、 一定以上の魔力を持つ

それゆえにロクサリスでは、

持って生まれた魔力の量が多いほど、『他者よりも優れ

ところが稀に、優れた魔法使い 基本的に、 驚くほど多くの魔力を持つ子が生まれるケースがあった。 子どもの魔力量は両親が持っている魔力の量と相関する。 の親から魔力を持たない子が生まれたり、

そこでロクサリス国民は、平民でも貴族でも、三歳になると魔力を測る事になっている。

たそうだ。 も珍しかった。 魔力を持つ者同士の間には子どもが出来にくい。 カと双子の妹ベリンダも、三歳になった日に測定試験を受けた。 それゆえ、 チュレク家姉妹の魔力測定は当時、 貴族の家に双子が生まれるのはとて 国中の人々の注目を集め

この国の貴族であれば、 その日、 これでは死にもの狂いで魔法を学んでも、小さな火花を起こすのがせいぜいだ。 両親にとって幸いだったのは、 魔力測定器の腕輪がウル 最低でも千の値は持っていなければならないのに。 妹のベリンダが千七百という優秀な数値を出した事だ ij カに示したのは、 わずか六という残

ロクサリ 男爵家の出来損ない令嬢として、国中に広まってしまったのだ。 ź の法律により家督は ベリンダが継ぐと決められ た。 同時に ウ ĺ 1) カ

ろう。

代わりに真鍮製の鸚鵡がいる。鴨をした三階建ての瀟洒な屋敷は、 (リーカは馬車から降りて、一年ぶりの我が家を見上げる。チョコレー 忌まわしい記憶を心の奥へ押しこめているうちに、馬車は実家の館へ 鸚鵡は、真鍮の止まり木の上から、ぎょろりとますがし、何も変わっていない。正面玄関の扉脇には、 ぎょろりとこちら 到着 ト色の屋根 ベルの

り嘲笑するのだ。 いである貴族には愛想がいいくせに、 魔法のかかったこの鸚鵡は、 とんでもなく意地が悪い。両親や妹のベ ウルリーカが一人で扉の近くにいると、 リンダ、 口汚く罵

一アッチイケ!

案の定、鸚鵡は真鍮の翼をバタつかせて耳障りな金切り声をあげ始めた。アッチイケ!「ウルリーカ!」

、キソコナイ、 ウルリーカ! ウラヘイケ! デキソコナイ、 ウルリーカ!」

喚き続ける鸚鵡を前に、 ウルリーカは深く息を吸った。

私がいつまでも、 たかが失礼な鸚鵡の悪態に泣く小娘だと思うなら大間違 傷つかない。

手提げ鞄から母の手紙を取り出し、鸚鵡の嘴の先につきつける。もうきちんと自立している大人。お前なんかが言う事に、傷つかな

一今日はお母様の命令で帰ってきたの。私は正式な客人よ。だ ま ŋ

こうして見ると、 主人の筆跡を目にした途端、 ただの古ぼけた真鍮の飾りだ。 鸚鵡はピタッと嘴を閉ざして動きを止めた。 この鸚鵡に何度も泣かされ、

けていた昔の自分が、 我ながら滑稽に思えてくる。

なった。 実家の陰鬱な思い出から一つ解放された気がして、 ウ ル IJ カは心がすっと楽に

そうだ。もう母の前でも、 身を縮め息を潜める必要はない。 魔力がなくても堂々と生

きれば良い。 七年前の夜に、緋色の髪をした素敵な魔術師から勇気と自信を貰い ここまで自分の

心も軽く、 ウルリーカは扉を開けようとしたが、それよりも早く内側から扉が 幸せを掴む事が出来たのだから。

「お出迎えが遅れまして、大変申し訳ございません。ウルリーカお嬢様」 扉を開けたのは年老いた家令で、彼は汗を拭きながら頭を下げる。それを見てようや

く、ウルリーカは奇妙な事に気づいた。 商家の暮らしにすっかり馴染んで忘れてい たが、この家の礼儀正しい家令が 馬車ま

で出して迎えに行かせた相手を玄関で出迎えないなど、珍しい。

「気にしなくていいのよ。それより、お母様が急に私を呼ぶなんて、 何かあ ったの?」

顔色が悪く落ち着かない様子の家令に、声を潜めて尋ねた。

「……お嬢様。奥様からのお話ですが、どうか冷静にお聞きなさるよう……」 家令が囁いている途中で、奥から扉の開く大きな音が聞こえた。

一ウルリーカ! 待ちくたびれたわ、何をグズグズしているの。早くいらっしゃい

母がたっぷりしたドレスの裾を揺らしながら駆けよってくる。驚いた事に、

機嫌でウルリーカの手をとり、居間の方へと引きずっていった。

玄関の鸚鵡そっくりな母の甲高いさえずりに、ウル「喜ばしい事にね、貴女へ求婚があったのよ!」 リーカは耳を疑った。そして、続

く言葉に、さらに驚愕させられる。

「求婚してくださった方は、宮廷魔術師のフレデリク・ クロイツ様。 有名な方だから、

貴女でも知っているでしょう?」

黙って、ただ頷いた。

七年前の夜会で、たった一度、話した、

あの緋色の髪の魔術師だ。

それ以来、

心に秘め続けている初恋の相手でもある。 しかし、嬉しいとは思えなかった。

彼が自分に求婚など、 何かの間違いか悪い冗談としか思えない

爵位に匹敵する名誉のあるものだ。そのうえ人当たりの良い性格で容姿も申し分な フレデリクは侯爵家の遠縁と聞く。 本人に爵位はないが、 宮廷魔術師という職は、

結婚適齢期の女性ならば、まず放っておかない好条件の持ち主である。 そんな彼が、魔力のない出来損ない令嬢である自分に求婚など……い や、

爵位も魔力も文句なしに高いご令嬢が求婚されたとしても、

まず信じ

カではなく、

ないだろう。

人なのだから。 だって彼は、 この国を統べる若く美しい女王の幼馴染であり、 今では公認

言葉もなく、呆然と母を凝視していると、 彼女は不服そうに柳眉を吊り上げ

「返事も出来ないなんて、 相変わらず駄目な子ねぇ! 説明するから、とにかく座りな

要約すると、 母は居間の長椅子にウルリーカを押しこむと、向かいに座ってとめどなく フレデリクから昨日、 父を通して縁談が持ちこまれたらしい。

最初は何かの間違いかと思って断った。しかし、 彼は確かにウルリーカ

婚だと言い、 支度金として十分な金額を渡されたという。

-……これでようやく貴女も屈辱的な職を辞められるのよ。 ウルリーカさえ良ければ、 来月にでも式を挙げたいとまで言 昔の反抗は許してあげるか いって 11 るそうだ。

この家にも自由に戻っていいわ。嬉しいでしょう?」

甘ったるい声で締めくくられ、ウルリーカはかなりムっとした。

『魔力なしの貴族娘に、 縁談など来る訳がないのだから、 家庭教師にでもなりなさい』

幼い頃から自分に繰り返し言い聞かせてきたのは、 母なのに

に、時々ボランティアで教師の真似事をすれば良いと主張していた。 もっとも母は、本気で娘を家庭教師にするつもりはなく、没落貴族の子どもでも相手

て、何もさせずにいるのは、 しのウルリーカが、高名な貴族の家に雇われるはずはないと母も承知である。 家庭教師は、家督を継がず嫁にも行かない貴族の娘がなれる数少ない職業だ。魔力な 世間体が悪いと思っただけなのだ。 かといっ

事を決めた。 しかし、ウルリーカは母の意に反して、 平民階級の裕福な商家に住みこみで雇われ

果的に自分の選択は正しかったと、今でも思っている。

母は激怒したが、

ウルリー

カもその時ばかりは折れず、

家出

も同然に飛び

世間体を繕い、貴族社会に媚びるなど、それこそ屈辱的だ。

を持っている……とは言うものの、それを母に主張しても無駄なのは、 誰に何と言われようが、この職業できちんと自立出来ている事に、 ウルリー 十分身に沁みて カは誇り

困った事に、 母に悪気はない ・のだ。

た娘を寛大にも許してあげていると、 彼女は自分が、 慈悲深い地上の女神だと信じて疑わない。 本気で思っているのだろう。 今も、 自分は間違いを犯し

20

を潤す。 ウルリーカは、 そして、 ため息混じりに返答をした。 メイドが置いていった茶を一口飲み、驚愕のあまり干からびて

だ。なにしろ母は、 したりする。 「何かの間違いでは? 父が勘違いをしたとは思い難いが、それを自分に伝えているのが、母というのが問題 よく話を自分に都合の良いように捻じ曲げて解釈したり、 ……お母様も、 彼と女王陛下のお噂をご存知かと思いますが」

ちが争いの末に急逝したため、 フレデリクとの恋仲が周知され 彼女が戴冠したのは、わずか五歳の時。当時、 たった一人残った王位継承者が彼女だ。 歳の時。当時、王家は暗闘が絶えず、父王と異母兄たているアナスタシア女王は、まだ二十二歳という若さ。

幼い女王は、補佐官たちの助けを借りながら熱心に国政を学び、 今では名実ともに立

派な女王へと成長した。

平民からも絶大な支持を得ていた。 には厳しい。そのうえ容姿も非常に美しく、金の巻き毛は陽の光を紡ぎあげたように輝 高い魔力を持ちながら驕る事なく、統治者として厳しく己を律し、 煌めく瞳は最上級の宝石さえ霞むと言われている。そんな彼女は今や、 情には厚 いが

国事で遠目に見ただけでも、息を呑むほど美しく妖艶な女性だと思った。 ウルリーカは、女王陛下と直接言葉を交わした事などない。けれども、 王宮の夜会や

だが、自分に厳しい彼女だけに、男性へ要求する水準も高いのだろう。どんな相手に甘 い言葉を囁かれても、洟もひっかけなかったらしい。 当然ながら、そんな女王へ愛を捧げたいという男性は、国内外からあとを絶たな

年へ、 に楽しげに言ったそうだ。そこから一気に噂が広まった。 ところがある日、宮廷の園遊会にて女王は、自分へ捧げる詩をつくってきた貴族の青 『私を好きにしたければ、フレデリク・クロイツに勝ってきなさいな』と、

話自体も、人から人へと伝わるうちに、尾ひれがついているだろう。 女王がはっきりと、フレデリクを愛していると宣言した訳ではない。 その貴族青年の

け回るようになっても、二人とも否定しないそうだ。 しかし、フレデリクが昔から女王と親しいのは事実だし、恋仲という話が王都中 噂の信憑性は高い。

もっとも、フレデリクは女王の愛人だという事を笠に着たりせず、 ていない。それが、 彼と女王の評判をあげていた。 女王も彼を特別待

デ リクが自分に求婚するなど信じられないのだ。 そういった情報は、 王都に住んでいれば自然と耳に入るから、 ウ ĺ IJ

母は観劇が大好きで、

特に恋物語には目がなかった。

好みの芝居は、

の男女が恋に落ち、

正式な結婚が出来ない立場ゆえに苦しむというものだった。

(フレデリク様の名を騙った詐欺という可能性もあるわ) ウルリーカがそう口にしかけた時、 母はコロコロと笑いながら、 一通の封筒をテーブ

ルの上に差し出した。 白い封筒はすでに開封されていたが、金の封蝋には確かに、 ウルリーカが慎重に便箋を取り出して開くと、 私とした事が、言い忘れていたわ。 求婚は女王陛下の紹介状つきだったのよ」 王家の紋章が押されてい

一匹の蝶がヒラリと飛び出した。

が自分の声でメッセージを届ける時に使う、 思わず便箋を取り落としそうになったが、 よく見れば半透明の美し 伝令魔法だ。 V

伝令魔法の形は人によって違うが、女王の伝令魔法は蝶の形をしていると聞

ヒラヒラと羽ばたく美しい蝶から、流麗な女性の声が聞こえてくる。

それは紛れもなく、王宮の夜会や国事の演説でいく度か聞いた、女王陛下の声だ。 -チュレク男爵。 ロクサリス女王・アナスタシアの名において……」

魔法の蝶は淡々とした声音で、 フレデリクをウルリーカの伴侶として推薦する旨を告

げ終えると、 紙の中へ戻った。

る手でそれを封筒に戻した。 白紙だった便箋に、薄い金色の蝶が判で押されたように張りつく。 ウルリーカは震え

「ほら、ご覧なさい。陛下のお望みなら、この求婚も納得ね」

母が勝ち誇った表情を浮かべ、それからもったいぶった調子で咳払いをした。

すからね。 9からね。くれぐれも、自惚れてでしゃばったりしないように。陛下と彼の邪魔になら「だから良い事? 貴女はフレデリク様の妻になるといっても、あくまで形だけの事で

ないよう、貴女が分をわきまえてつつましく暮らせば、全て上手くいくのよ」

「……どういう意味でしょうか?」

「ほら、お芝居にもよくあるじゃないの。貴女も一緒に観た、あれよ…… 上機嫌な母の不穏な言葉に、ウルリーカは嫌な予感を覚えて声を上擦らせた。

ように、身体が冷えていくのを感じた。 そう言って母が口にした芝居の題名を聞き、 ウルリーカは冷水を浴びせられた

度も観に行くし、娘たちにも同行を強要する。 母が非常に気に入っていたその芝居は、互いに家督を継がなくてはならない身にある

銭さえ与えておけば、夫に関心を払わず遊び呆けるような御しやすい相手と……。 めでたしめでたし には結ばれないながらも子どもも授かり、真に愛する相手と、 女は結婚せず、家督だけを継ぐ。そして二人は、男の愚かな妻を上手くあしらい、 主役の二人は悩んだ末、男がことさら愚鈍な女を選んで、婚姻を結ぶ。 -そんな筋書きだ。 幸せな人生を送りました。 頭の悪い、 正式

ルリーカは愚鈍なお飾り妻だと、母はそう言いたいのか。 -つまり、 あの芝居に例えるならば、主役の二人は女王とフレ デリク。

定以上の魔力を持つ男性は、三十歳までに妻帯する事を義務づけられていた。 高い魔力を持つ者ほど子どもに恵まれにくいための少子化対策だ。

ロクサリスの特殊な法律に起因する。

口 ークサ

リス

こんな物語が流行するのは、

そのような事情なので、男性貴族は複数の相手と婚姻を結ぶ事も認めら れて

継者を生ませてきた。 ない事になる。子どもの父親はわかりづらく、 数の恋人と交遊し、婚外子を産む事が多い。その場合、子どもに法律上の父親は存在し 王家においては、それがさらに顕著になる。王が男性であれば、複数の后を持って後 一方で、女性貴族に結婚の義務はない。かわりに、家督を継ぐ女性は、 女王であれば、 伝統的に父親不在の跡継ぎを産む。 揉め事の原因となる可能性が高いためだ。 未婚のまま複

それなのに、今年で三十歳になる彼は、誕生日までに妻を娶らなければならない。 フレデリクは、どれほど女王と愛しあっていようと、公的に結ばれる事は出来ない ロクサリス建国以来、女王は何人か存在するが、女王の夫は一人も存在しないのだ。

る……それを女王も了承して紹介状を書いたと、そういう事になるのだろうか だから彼は、その心に女王を抱きつつも、国法に反しないために形だけの妻を迎え

あまりの話にウルリーカは頭を強打されるに似た衝撃を覚えた。

「そのような事を、 ウルリーカは呻いた。 フレデリク様がなさると……?」

きたら、まるで娘の方がおかしな態度だというみたいに、キョトンと小首を傾げた。 「貴女も、陛下と彼が恋仲だと聞いているでしょう? 陛下は彼を愛していても、安易 膝に置いた両手を、指が白くなるほど固く握る。

ところが母と

に王配へ据える訳にはいかないし、いつまでも彼を独り身にさせておく事も出来ないも

の。このやり方はとても賢いと思うわ」

自分の娘が貶められているというのに、 憤慨どころか賞賛する母に、 ウル

期待をしていたのだと思い知った。 とうに愛想をつかしたと思っていたのに、 それもたった今、 霧散した訳だが。まだ自分はこの人へ、 どこかしら

(フレデリク様が……あの人が、 おまけに、 どれほど信じたくないと思っても、今回ばかりは母の主張が正しそうだ。 そんな真似を……本当に?)

げる。 緋色の髪をした青年魔術師の優しい笑みを思い出し、 ウルリー カ の瞳に涙がこみ上

女王陛下の十五歳の誕生日を祝う夜会だった。 フレデリクと会ったのは、 ウルリー カが十二歳の時だ。 それは王宮で開かれた、

盛大な夜会には国中の貴族や著名人が招待され、 城の煌び やかな舞踏ホ

着飾った人々で満員となっていた。

りつつ、 楽団が優美な曲を奏で、礼装用のローブを着た宮廷魔術師たちは会場の安全に気を配 出席者たちを楽しませるため様々な魔法を披露している。

ウルリーカも妹のベリンダと一緒に、父母に連れられて参加した。

る気合のいれようだ。 派手な宴が大好きな母は、自分と娘たちのドレスも、 いつもより豪華なものを新調 す

界の耳目を集めていたそうだ。それが商才こそあるものの、 の父と結婚した時には、 Lest 伯爵家の出身であるチュレク男爵夫人は、娘時代にはその華やかな美貌で、伯爵家の出身であるチュレク男爵夫人は、娘時代にはその華やかな美貌で、 随分と周囲を驚かせたらしい。 容姿は今一つ冴えない男爵 常に社交

アクセサリーなのだ。 る目立たない夫は、まさに理想の伴侶。そして娘たちの存在も、彼女には己を輝かせる もっとも、 いつでも自分が主役でありたい母にとって、経済力が十分あり、 ウルリーカとベリンダには、その理由がわかる気がする。 自分のい いなりにな

着飾った自分の両脇に添える。そして、 その夜も母は、自分の産んだ双子の娘たちに、 意気揚々とご婦人方の輪に飛びこんだ。 色違い の揃い のドレスを着せ、

るでしょう?』 ·ええ、この子たちが双子ですのよ。髪や目の色は違いますが、 顔立ちは 7 V

笑を始めた。 . ダは、いつも一際耳目を集める。双子など滅多にいないロクサリス貴族の中で、 大広間の一角で、 揃 11 のドレ スを着たウル 1) 1]

母はさっそく領地から来たばかりだという貴族たちに話しかけ、

談

しげな視線を向ける。 扇で口元を上品に隠した母は、 自分と同じ髪と瞳 の色を受け継いだべ IJ

な身でしたけれど、 ベリンダは私の娘時代にそっくり。 男爵家を継ぐこの子は、 そうもいきませんわ。 ただ、 私は兄が家督を継ぎましたので気楽 教育面では厳しく躾

けておりますのよ。 の愛ではございませんものね』 もっと自由に遊ばせてあげたいとも思いますが、 甘やかすだけが親

一気にまくしたてる母は、一体いつ息継ぎをしているのか不思議だ。

取り巻く貴族たちが『そのお気持ち、わかりますわ』とか『立派なお考えですの

感心してみせると、母はいっそう笑みを輝かせる。

そして、その場にいた青年貴族の一人が、ベリンダにうやうやしくダンスを申しこむ 母は大喜びで愛娘を押しやった。

さい、というのが母の持論だった。 から寵愛を受けるかを選ぶ事になる。 爵位を継ぐベリンダは、いずれ出来るだけ良い条件の男性と結婚する どちらにせよ、 今から社交界に顔を売っておきな

ウルリーカも、つくり笑いを顔に貼りつけてベリンダを見送った。

ちなみに、 いてもいなくても、まったく事態は変わらないのだが。ベリンダは愛想笑いを浮か 一緒に来たはずの父は、いつものごとく着いた途端に姿を消している。 ま

べたまま、青年貴族に手を取られて舞踏ホールへと消えていく。

ウルリー 妹が踊りに連れ出されたあとの展開を容易に予測出来、 カはつくり笑いを消さないように、 懸命に努力した。 暗澹たる気分になるけれど、 夜会で暗い表情や不機嫌

な態度を取るのは、 非常に無礼な事とされているから。

『こちらのウルリーカは……お恥ずかしい話ですが、きっと皆様もご存知でしょうね?』 思ったとおり、母が今度はウルリーカへ、慈悲深そうな視線を投げかけた。

やはり、いつもと同じ反応が返ってくる。

貴婦人たちは扇を口元に押し当て、少しばかり気まずそうな視線を互いに交わしてか 扱いに困るような視線をウルリーカに向けた。

のだ。 そんな貴婦人たちを余裕たっぷりに見渡すと、 ウル ij カを優しく抱きよせる

ダと同じく大切な娘ですのよ』

『本当に不憫な娘だと思いますわ……けれど、

魔力を持たずとも、

私にとってはべ

リン

母は自分の言葉を証明するために、 わざわざベリンダと揃いにさせたウル 力 の上

質なドレスを、誇らしげに撫でた。

困らぬよう考えてあげるのが、 ていけるようにと、 『残念ながら、この子には縁談も望めそうにありませんから、将来は家庭教師として 教育を受けさせておりますの。どんな子であっても、 母親として私に出来る、 精いっぱいの愛情ですからね』 せめて将来に やっ

ウルリーカは黙って笑みを顔に貼りつけたまま、 感極まった声をあげ、 ほかからも同意の声があがる。 貴婦人たちが慈悲深い母を褒めそや

すのを聞いていた。

たけれど。 本当は、 喉に石でも詰まっているように息苦しく、 今すぐこの場から駆け去りたか

失礼いたします。今宵はお楽しみ頂けておりますでしょうか

涼やかな青年の声がかけられたのは、その時だった。

ウルリーカが振り向くと、宮廷魔術師のローブを羽織った緋 色の髪の青年が立っ

首元には、獣の牙らしきものを下げた黒い革紐を巻いている。

その頃はまだ『ゲの魔術師』の名はさほど知れ渡っておらず、 ・ウル IJ] カを含めてそ

の場にいた人たちは、彼を宮廷魔術師の一人として認識した。 素晴らしい夜会にお招き頂き、女王陛下には感謝の言葉もございませんわ

「ええ。

母が優雅に答えると、青年魔術師も整った顔に極上の笑みを浮かべた。

『女王陛下より、皆様へ祝福の光を届けるようにと申しつかりました』

青年が、素早く口の中で呪文を呟き片手を振ると、 母や貴婦人たちの頭上へ、

細かな光の粒子が降り注ぐ。

この美しい光の雨は、結婚式や誕生祝いの席などで喜ばれる派手で高度な幻視魔法だ。

母たちがうっとりと虹色の光に見惚れていると、青年が素早くウルリー実際に幸運が訪れる訳ではないのだが、見た目の美しさは素晴らしい。 青年が素早くウルリーカへと耳打ち

『抜け出したいなら、 ちょっと具合が悪い ふりをして』

えつ・

思わぬ言葉に驚いたが、 無意識のうちに、 青年の言葉に従う。 目を伏せてよろめくと、

青年に素早く横抱きにされた。

『ウルリーカ!!』

眉を顰めて声をあげた母へ、青年が軽く会釈をする。

『どうやらお嬢様は、少し休まれた方が宜しいようですね。 私が休憩所までお連れ

飾りも花壇もない。 庭の一つに彼女を案内した。 そして彼は、ウルリー 建物に陽光と風を送る目的で開けられたものだろう。 カを抱い 小さな真四角の庭は、 て素早くその場をたち去ると、王宮に 芝生の手入れこそされているものの、 いく 芝生の上にス 0 もあ

トンと下ろされる。



眺めていた。 ウルリーカは呆然としたまま、青年魔術師が自分たちの周囲に小型の結界を張るのを

『座ったら?』

愕から醒めて口を開いた。 結界を張り終えた青年が芝生の上に座り、 隣をポンと叩く。 ウルリーカはようや

····・·どうして、 私が抜け出したがっていると思ったのですか?』

立ったまま質問する。

大人しく抱かれたままでいたけれど、

この青年がどんな

八物かも知らないのだ。

あの場の空気に耐え切れず、 不安がこみあげてきて、

すると青年は、少し困ったように笑い、肩を竦めた。

『だって、あんなの腹がたつだろ? 俺が君だったら、 あの場の全員を蹴っ飛ばしたく

あまりにも率直すぎる言葉で自分の本心を暴露され、 ウルリ カは一歩後ずさった。

優しくしてくれるのに……?』 ドレスを握り締め、 そんな……私が母に腹をたてるなんて……魔力がない、 こんな出来損ないの私に、

しどろもどろに否定しようとするけれど、

上手くいかなかった。

『家庭教師に、なりたくない訳じゃないんです。

私たちを教えてくださる先生は、

優し

目の奥が熱くなって、必死で堪えていた涙が勝手に溢れ出す。

『だって、私は……そんな事を思っては……』

34

利などないと思っていた。 ベリンダはともかく、 自分は母を彩るアクセサリーとして使われても、

として密かに平民階級へ養子に出されたり、修道院へ入れられたりする事が多い。 ロクサリス貴族の家に、ウルリーカのような魔力がない子が生まれた場合は、 恥

それなのに母は、 自分を家族の一員として扱い、ベリンダと遜色ない暮らしを与え

める貴族たちは、 これはとても幸運な事なのだから、 いつもウルリーカを諭すのだ。 ませ 貴女は優しいお母様に感謝するべきだと、

『駄目だって……わかっているのに………っ!』

両手で顔を隠しても、手の隙間から嗚咽が零れていく。

魔力を持たずに生まれた自分が悪いのだと思っても、内から膨れあがり続ける母への

抵抗感に、押し潰されそうだった。

それはそのまま、 恩知らずな自分への嫌悪感と罪悪感になって、 二重三重に苦しくて

たまらない。

リと座りこんで、大声で泣いた。 この気持ちを、 どう表現すれば良いのかすらわからずに、 ウルリーカはその場にペタ

好きなだけ泣いていいよ』 『誰だって、心を踏みにじられたら怒って当然だ。……あぁ、 結界を張ってあるから、

青年は静かに言い、 ひたすら泣き続けて、しまいに声も嗄れかけた頃には、随分と時間が経っていたと思う。 黙って隣にいてくれた。

泣きすぎて頭がぼうっとし、何も考えられず、ぼんやりと青年によりかかってい

王宮の中庭から見える、四角に切り取られた夜空は、とても綺麗だ。

ける。 ウルリーカは満天の星空を見上げながら、 聞かれてもいないのにポツポツと喋り続

家族の事や、玄関の失礼な鸚鵡。 家庭教師になれと言われている事など……

くて素敵ですし……知らない事を学ぶのも、それを誰かと分かちあうのも好きです……』

ぼんやりしたまま本音を言うと、 そっと背中を撫でられた。

||君は、 ちゃんと自分の意見を持っているね。 それだって魔力と同じく、 立派な資質の

それから彼に送られ、 その言葉には、慰めや同情など微塵も入っておらず、また泣いてしまいそうになった。 あの時に見た綺麗な四角い夜空だけが、 両親とベリンダの所へ帰った時の事は、あまり覚えていない 鮮烈に心へ焼きついていた。

何かの間違いであってほしい。これではあの子爵の息子と同じではないか。 その彼が……フレデリクが、今度は平然と自分を踏みにじるなど、 信じたくな

魔力なしの出来損ない令嬢と陰口を囁かれ、あからさまな哀れみの目で見られる。 そう、フレデリクに会ったあとも夜会が不快であるのには変わりがなかった。行くたび

極めつきの事件が二年ほど前の夜会で起こった。

年から、 ほかの貴族の目を避けて、一人で庭の隅にいたウルリーカは、 無理やり乱暴されそうになったのだ。 酒に酔った子爵家の青

笑を浮かべ、見なかったふりでたち去ってしまう。 必死で助けを呼んでも、声を聞きつけた人はそれがウル リーカだと知ると、

ベリンダが駆けつけ、暴漢の後頭部を蹴りとばしてくれなければ、

本当に危ういとこ

ろだった。

ベリンダは大騒ぎで怒ったが、 未遂だったうえに、 相手は男爵家よりも格上の子爵家。

何より、被害者がウルリーカだったから……あっさりと不問にされてしまった。 そのうえ、大きな瘤をつくった子爵令息が、 去り際にこう吐き捨てたのだ。

『魔力なしのくせに貴族面をしていやがる図々しい出来損ない女なんか、

何が悪い!』

るウルリーカを見捨てた者たちの、 その日を境に、 忘れたいのに、子爵令息の罵声はいつまでも耳の奥にこびりついている。 ウルリーカはどんなに暑い日でも、 冷ややかな目も。 肌の 。露出を極端に抑えた衣服 しか

助けを求め

ひたすら地味で野暮ったい、遊びでも手を出す気になれない女と見られるように努めて それまではごく普通の範囲でお洒落を楽しんでいたが、 必要な場で以外は化粧もせず、

着なくなった。

夜会に出席する事もやめた。 母も流石に、

たくないためだが。 わなくなった。それはウルリーカの気持ちを慮ったのではなく、 それからは夜会についてくるようにとは言 単に醜聞を蒸し返され

見なされているか、 自分がこの国の貴族……い 改めてあの時に思い知らされた。 や、 『魔力を持って生まれた選ばれし者』 たちから、

の上では貴族令嬢でも、

『どんな扱いをしても構わぬ出来損ない』

んな制約の中、愛する女王との関係を遠慮なく続けるための、 クは貴族の縁戚だし、 宮廷魔術師である以上結婚しない訳にはい お飾り妻という道化役を

押しつける相手として、 ウルリーカはまさに最適な人材なのだろう。

(……こんな求婚、 信じられないわ)

ウルリーカは何かに縋るように胸中で呟い たが、 目の前には女王の紹介状がちゃ

しまった。 この家に足を踏み入れた時は持って いたはずの解放感も自信も、 あ

0

ウルリーカはノ ロノロと顔を上げ、 優雅に扇を弄んでいる母へ向けて口

「フレデリク様の求婚は、お断りします」

の道化役のような間抜け顔で、こんな状況でなければ噴き出してしまったかもしれない。 「ど、どういうつもりなの? 貴女、分をわきまえなさいと……っ!」 その瞬間、母は顎が外れはしないかと思うほど、 あんぐりと口を開けた。 まさに喜劇

激昂した母がテーブルを平手で叩き、 薔薇模様のティーセットが派手な音をたてる。

思いますので、この家との縁を完全に切ってください。今まで娘として扱ってくださり ありがとうございました」 「ええ。分をわきまえます。魔力のない私が貴族を名乗るのは、やはりおこがましいと

自分でも驚くほど冷ややかな声で、ウルリーカは言い放った。

きな相手と結ばれる娘など、 ない。しかも家督を継がない者ならば、 意にそぐわぬ結婚というだけなら、ウルリーカにかぎらず貴族令嬢にとっては珍しく 一握りだ。 親の決めた政略結婚をするのが主で、 自由に好

よくいた。 る者も多く、 ている。それをいい事に、正妻との間に嫡子がいても、妻に飽きて新しい女性を欲しが ロクサリスの男性貴族は、子に恵まれ難いため、 家の経済事情などから、身売りするも同然に彼らの側妻となる貴族令嬢も 複数の配偶者を有する事を認められ

を傍に置き、側妃たちは王の寵愛を競って壮絶な争いをした。 現にアナスタシア女王の父である前王も、 二人の王子を儲け ながら次

貴族の家でも、似たような嫉妬絡みの事件がいくつも起きている。妻同士 相手の産んだ子を殺したり、 思い余って夫を殺害したりなど・ 示が毒殺 0

デリクの求婚を受け入れ、

自分がそんな感情を抱いてしまったらと、

で背筋が凍る。

緋色の髪の魔術師に救われた日から何年も経って、今だって、もうこんなにも胸が痛いのだ。 あの時の彼が、 フレデリク クロ

イツという名で女王の愛人だと知った。

それを知っても悲しいとは思わなかった。 最初からこの恋に期待して 13 なか たか

あんなに素敵な人だから、きっと大勢の女性が彼を好きになると思っ てい

下が彼に惹かれるのも当然だと、嬉しく思うほどだった。

輝かしい二人は、まるきり別世界の住人だったから、 美しい物語でも見て いるか

うに、素直に憧れの視線を向けられたのだ。

それなのに、 自分が中途半端に傍でかかわるなど、耐えられ な

母を睨むと、その声と表情から、娘の本気を感じ取ったのだろう。

ているのね? 母親ですもの、貴女の気持ちはよくわかるわ。でもこれは、 「ねぇ、良い子だから落ち着きなさい。魔力がないばかりにと、惨めな気分で自棄になっ 可哀想な貴

女のために、 せめて安泰な暮らしをと思って……」

猫撫で声で手を伸ばす母に、ゾッとした。この人こそが、誰よりも自分を見下している。

反射的にその手を払い除け、ウルリーカは手提げ鞄を掴んで立ち上がる。

今すぐこの家を出て王都に帰るつもりだった。

「これ以上お話ししても無駄ですわね。フレデリク様には、 私個人の我が保でお断りし ***

ますと、直接お伝えしますので、どうぞご心配なく」

「な……っ!」女王陛下から紹介状まで頂いているのよ!! 家の顔を潰すつもり?!」

「幸いにも、 私とはすでに縁を切っているとご説明すれば、咎められる事もないでしょう」いにも、私が一年前から家を出て働いている事は、広く知られております。陛下に

ウルリーカはきっぱりと宣言して踵を返した。 頭も腹の中も、 全部フツフツと煮えく

り返っていて吐きそうだ。 しかし、扉に手をかけた途端、

絡みついた。

鋭い呪文とともに、

何かがウルリー

力

の両足首に強く

転びそうになり、 壁に手をついてなんとかバランスを保つ。

見れば足首が魔法の光で出来た輪に拘束されている。 い魔法の杖をこちらに向けていた。 険しく柳眉を吊り上げた母が、

今さら取り消

「そんな、勝手に……っ!」

「頭を冷やしなさい。婚礼の日まで、 声を引き攣らせたウルリーカへ、母はうんざりだというような身ぶりで手をふ 貴女は家から一歩も出しませんからね。勤め先に った。

今日づけで辞めると連絡をして、荷物も取りに行かせるから、安心なさいな」

そして、母は宣言どおりの事を実行した。

家へ退職の通知を送りつけたのだ。 洗面所と浴室つきの客間に鍵の結界を張ってウルリーカを閉じこめ、 住みこみ先の商

かで礼儀正しい彼が、無礼さを少しは和らげてくれたと思う。 ウルリーカの嘆きを見かねて家令が通知を届けてくれたのは、幸いだった。 それでも、 教え子の エイ

ダと商家のご夫妻に、大変な迷惑をかけてしまった事には違いないけれど。 結界はどうしても破れず、疲れ果て寝台で啜り泣いていると、不意に扉を叩く音がした。

「ウルリーカ? 入っても良いかしら」

華やかな美貌と社交的な性格の持ち主だ。 聞こえてきた声は妹・ベリンダのものだった。彼女は、 内気で地味な姉とは正反対の、

この数日、 友人宅に出かけていると家令から聞いていたが、 ちょうど帰宅したのだろ

気づけば窓の外はもう陽が沈みかけてい

「どうぞ……」

かった扉が簡単に開いた。 身体を起こし、泣きすぎて嗄れた声を絞りだすと、 内側からはいくら押しても開かな

蜂蜜色の髪と菫色の瞳を持つ双子の妹が、非常に憤慨した様子で手を開く。んて私に泣きつくのよ。ちなみにこれは、お父様から」 「とんでもない事になっているみたいね。 お母様ったら、 ij 1 カを説得してくれ

から小さな蜜蜂の姿をした父の伝令魔法が飛びたった。

彼女の手

さら断っては……ともかく、お前は努力家で気の良い娘だ。フレデリク殿も、そう悪い 『久しぶりだね、ウルリーカ。お前の返事を聞かずに事を進めて悪かった。しかし、

扱いはしないはずだよ。私は仕事が忙しくてしばらく家をあけるから……お母様に謝り

方になってくれないようだ。 それだけ言 い、蜂は消えてしまった。 最初から期待してい なかったが、 やはり父は味

接してくれた。 決して意地悪な父ではない。 父親として愛情を向けてくれていると思う。 ウル ij カに魔力がなくとも、 ベ リンダと分け隔てなく

するところを一度も見た事がない。 男爵家より各段に身分の高い伯爵家の出身で、気の強い母に、 今回も、 娘の生涯より妻の機嫌をとるようだ。 父が何か反論

腰を掛けて口を開いた。 ウルリーカはため息をつき、 寝台から安楽椅子に移動する。 ベリンダも近くの椅子に

なきゃ。 「いくら正論を言っても、あの人が引き下がる訳な 当分はここから出してもらえないわよ」 いでしょ。 もっと煽てて上手く騙さ

きっぱりと言われ、ウルリーカは素直に頷いた。

くて……」 「つい、カッとしちゃったのよ。フレデリク様がこんな事をなさる方だとは信じたくな

ベリンダはウルリーカに魔力がないと蔑んだり同情したりせず、本当に姉妹として 幼い頃はベリンダの魔力を嫉んで、 ハキハキとものを言う双子の妹は、 酷い意地悪をしてしまった事もある。ウルリーカにとって頼もしい相談相手だ

て、とても苦労しているのも知っていたのに。同じ胎内で育った妹が、 慕ってくれていたのに。そして、いつも跡継ぎという事で母から強烈な期待をこめられ したような気がして、嫉ましくて憎らしくてたまらなかったのだ。 魔力を独り占め

ウルリーカが望んで魔力を持たなかったのではないように、 ベ リンダだけが

省して謝ると、ベリンダは快く許してくれた。 魔力を持ったのも彼女のせいではない。 ウルリーカが自分の醜さと過ちに気づき、 反

それから妹とは本当に仲良くなれたのだ。

明けると、彼女は神妙な顔をして聞いてくれた。 そのベリンダにも、ずっと秘密にしていたフレ デリクへの想いを、 ウル ij カが打ち

様には幻滅したわ。 「ウルリーカが怒るのは当然よ。私だってお母様の話を聞 あんまりなやり方じゃない」 V て、 女王陛下とフレデリク

直った。 見えない二人を軽蔑するように、 ベリンダは顔をしかめたが、 ふとウル IJ 力 向き

りだったのかもしれない……そうよ! まともな人なら、 「でも、フレデリク様が本当にウルリーカを好きだという事はないかしら? 恋仲の噂は周りが勝手に言っているだけだから気にしないようにってつも きっとそういうつもりだった 陛下から

残念だけれど……私はフレデリク様に、 思いがけない言葉に、ウルリーカは息を呑む。そうだとしたら、どんなに幸せだろうか。 好かれる理由がないわ。 七年前に一度話した

のよ

きりなのよ」

しているお店でしょう? ウルリーカは王都で暮らしているじゃないの。それも家庭教師先の家は、 そこで見そめられたのかも。彼が来たりなんかしなかった?」 すごく繁盛

記憶を手繰りよせてみたが、「……ないわ」 フレデリクと会った覚えなどない

までも幅広く揃えている。 だ。取り扱う品はどれも一級品であり、 家庭教師先の商家・ハーヴィスト食料品店は、ロクサリス王都でも有名な高級食材店 国内はもとより、 大陸各国から輸入された珍味

談に始まり、主人や奥方の浮気、ワケ有りと見られる客人の逗留など…… 彼らの最大の娯楽は、 あくまでも食材店だ。店の常連客は富裕層の台所を預かる使用人たち。 買いものがてらに他家の使用人たちとするお喋りだ。日常 『ここだけの

談めかした噂はある。 話』と、各家の秘密が漏れていく。 そのため、ハーヴィスト食料品店には、 各国の課者が密かに訪れているらしいと、 冗

思えない。 しかし宮廷魔術師のフレデリクが、 自分で食料の買い出しや諜者の真似事をするとは

道で偶然に会ったとか……」

ベリンダはなおも続けようとしたが、 ウルリーカは首をふった。

「王都には大勢の人が住んでいるし、現実はおとぎ話みたいに、都合良くはいかないのよ」

そう言った途端、ベリンダが顔を真っ赤にした。

れているのだ。 は知っている。 気が強くハキハキしていて、社交界では男たちを軽くあしらう彼女だが、 ベリンダはとても純情で、おとぎ話のような、 一途で純真な恋物語に憧 ウル リーカ

「わ、 わかってるわよ!」

咳払いしたあとで、ベリンダは気の毒そうに肩を竦めた。

ないわね」 「……それはともかく。もう断ってもウルリーカが困るだけだし、 諦めて結婚するしか

やはりベリンダから見てもそうかと、 エイダには男爵家の紹介でほかの家庭教師を斡旋するそうだし、 ウルリーカは肩を落として頷く。 ウルリーカとフレデ

リクが結婚する話も、すでに母が広めているらしい。 「仕方ないわね、あまり悲観しないようにするわ。そうね……これからは暇になるでしょ

冗談めい

うし、フレデリク様に許可が貰えれば、近所の子に無料で読み書きでも教えようかしら」

こんな事を言う余裕が出来た。

屋をちゃんと整えてくれたらしい。

王都には平民向けの学校もあるが、 学費が高く通えない子が大勢いる。 家庭教師をし

てお金を貯め、 安価で通える私塾を開くのがウルリーカの夢だった。

ベリンダは一瞬、 驚いた顔をしたが、すぐに笑い始めた。

せになるのにまで、文句は言えないわよ」 「それ、最高ね! 陛下とフレデリク様がどんなつもりでも、 ウルリー カが個

たく変わらないのを、 承知していたからだ。

久しぶりに会った双子の姉妹は、気を取り直して明るい話題へと話を変えた。……も 二人が不自然なほど明るくはしゃいでしまったのは、 どう考えようと事態はまっ 0

二つの可能性

結婚式はつつがなく終わった。

招待客には隣の建物で祝い料理が振る舞われ宴となるが、夫婦となった二人は、 ウルリーカはフレデリクとともに、式堂の外で待っていた婚礼馬車に乗りこんだ。

衣装のまま新居へ向かうのがしきたりとなっている。

二人が座ると、花を飾った二頭立ての馬車は、軽快な音をたてて石畳の道を進み始める。 行き先は、王宮に程近いお屋敷街にあるフレデリクの家だ。

式を挙げた直後から別居の可能性も覚悟していたのに、フレデリクは

ラル

IJ 力 の部

すぐ向かいにフレデリクが座っているので、 ウル ij カは目があわない ように俯いて

「……大丈夫? 気分が悪くなったのなら、 停めてもらおうか」

不意に声をかけられ、 ウルリー カは弾かれたように顔を上げた。 フレデリクが心配そ

がってくれたのだ。

うにこちらを見つめてい

いえ、 平気です」

慌ててしゃんと胸を張り、 強ばった口元に無理やり笑みをつくった。

「無理はしないでね。俺もかなり緊張したし、 疲れるのも当然だから」

紐には彼の呼び名の由来となった、鋭い獣の牙が下げられているはずだ。
元から、礼装には不似合いな黒い革紐がチラリと覗いた。今は衣服に隠れているが、 フレデリクは微笑し、自分の首に巻きついているタイを軽く緩める。 白いシ ャツの首

だからだと囁かれている。その真偽はともかく、 彼はその首飾りを、肌身離さず身につけているそうで、 結婚式にもつけていたのだから相当に それは女王陛下から賜 0

「お気遣い、 ありがとうございます」 大切なのだろう。

ウルリーカは軽く頭を下げた。

お願いだから、気を遣わないでほしいと、 痛切に思う。

婚礼に関するフレデリクとのやりとりは、全て母が取り仕切ったため、 ウル ijl カが

彼と顔をあわせたのは、 式の直前になってからだ。

簡単な挨拶をし、 これからの予定を慌しく説明されただけだが、 そのほ h 0

な会話中、フレデリクはとても感じ良く接してくれた。

優しい眼差しを向けてくるから、うっかり自分に好意があるのではと自惚れてしまいそ。 その姿は、七年前の思い出の彼と微塵も変わらない。しかも彼は終始、 ウルリー カに

うになる。

しかし

ウルリーカはつま先に力を入れて姿勢を正し、 急いで窓の外へ視線を逸らした。

女王陛下が夢中になるだけあって、とても素敵な方ね』

デリクと式の打ちあわせをしてきた母だって、感嘆し褒めちぎっていたくらいだ。

女性に対する理想的な扱いを心得ているのだろう。

ると、彼はとても安心して喜んだらしい。 それに、母が女王陛下からの紹介状の意味をウルリー カがきちんと理解した旨を告げ

ルリーカに『まともな求婚』をしたという可能性を主張して、 自分の意見は正しかったと得意満面の母に、 ベリンダは非常に憤慨していた。 妹は最後まで母に食い下 彼がウ

賑やかな表通りを抜け、 カは無言のまま窓の外に視線を固定した。二人を乗せた馬車は進ん 集合住宅の多い地区を進むと、 広い庭つきの屋敷がたち並ぶ で

通りに着いた。

で過ごす。ロクサリス王都には、貴族の別邸地区がいくつもあり、この通りもその一つだ。 自分の領地に居城や館を持つ貴族も、 大抵は王都に別邸を持ち、社交シーズンはそこ

やがて馬車は一軒の門前に停まった。フレデリクが奥にある屋敷を示す。

「着いたよ。古いけど不便なところは改装してあるし、気に入ってくれると良 もう陽は暮れかかっており、薄闇の中で屋敷の煙突からは、煙がたち上っていた。

ら譲り受けたものだという。彼はここで数人の使用人とともに暮らしているそうだ。 この屋敷は、 フレデリクが成人になった際、 後見人であるアイゼンシュミット侯爵か

ために、 どの準備を整えてくれているらしい。 結婚式には屋敷の使用人たちも列席したらしいが、招待客が多く、式堂も薄暗かった 人々の顔など殆ど見えなかった。 彼らは式が終わる前に早々と帰宅し、 夕食な

「気に入るどころか……フレデリク様、とても素敵なお屋敷ですわ

を感じさせる立派な屋敷だ。 お世辞ではなく、ウルリーカは心底から感嘆した。決して大きくはないが、 風格と品

優美な外観の歴史ある屋敷に感動していると、フレデリクに手を差し出された。

「デリクと呼んでくれ。 ウルリーカ……ルゥと呼んでも良いかな?」

いと思っているのに、頬に熱がこもるのをどうしても止められない。 「……はい」 正面から向けられた屈託のない笑顔に、 ウルリーカは息を呑む。妙な期待などするま

がった。 礼装用の白手袋をはめた手を恐々と握り、 足が震えそうになるのを堪えて立ち上

影が現れた。 フレデリクの手を借りて婚礼馬車を降りると、 重々しい鉄門の陰から、 ぬっと大きな

「お帰りなさいませ」

野太い声とともに現れた巨大な岩石……い や 岩石のごとき屈強な巨体をした初老の

男に、ウルリーカは目を見張る。

元と、深い刀痕の走る頬。頭の毛はそられ、重そうな瞼の下に鋭い目が光っている。 「家令のイゴールだ。昔からアイゼンシュミット侯爵に仕えていたんだけど、 筋骨隆々の大きな身体は黒い背広へ窮屈そうに押しこまれ、 ド迫力の巨漢を前に、ウルリーカが立ち竦んでいると、フレデリクが笑いながら言った。 厳しく引き結ば れた口

に仕官する時、 「どうぞ宜しくお願いいたします。 一緒にここへ来てくれたんだよ」 奥様」